

小野直子作 「変形トライアングル」

< 前編 >

- (音楽) (ラジオのDJ)
- (効果音) (スイッチを切る)
- 高藤香モノローグ (ため息) なんかつまんない。何やってもダメ。ひろ子のこと考えちゃってムシャクシャするわ。それにしても雄君、わたしとひろ子とどっちが好きかしら。…あーあ、友達同士で同じ人が好きなんて、つらいなあ。
- 香ナレーション わたし、悩める女子中学生。名前は高藤香^{たかとうかおり}。中学に入ってからできた親友の牛島ひろ子と、幼なじみの鈴木雄と、ただいま三角関係。こんなの初めての経験だから、何やっても落ち着かない今日このごろなのです。
- 妹 園子 お姉ちゃん。ラジカセ使っていないなら貸してよ。それから、こないだのユーミンのテープ、早く返してよね。
- 香 うるさいなあ、もう。はいはい、ほーら。
- (効果音) (テープが床に落ちる音)
- 園子 投げるなんてひどい！ もう絶対貸さないから。
- 香 いいもん。ラジカセ貸さないもん。
- 園子 ムー！ 母さんに言うわ！
- (効果音) (ドアをバタンと閉めて出ていく)
- 香モノローグ あーあ、妹に当たることなかったのに…。もうイライラしてるから。そうだ、かなえさんに電話しよう。かなえさんと話せば、なんとなく気が晴れそうな感じ。
- (効果音) (電話のダイヤル音。呼び出し音。)
- 白石かなえ (フィルター音) はい、白石です。
- 香 もしもし、香です。かなえさんですか？
- かなえ (フィルター音) あ、香ちゃん。どうかした？ なんだか浮かない声ね。
- 香 うん。ちょっとお話があるんですけど…。
- かなえ (フィルター音) じゃあ、香ちゃん。もしよかったらうちに来ない？ 今、わたし一人だから、ゆっくりお菓子でもつまみながら話を聞くわ。
- 香 いいんですかぁ？
- かなえ (フィルター音) どうぞ どうぞ。それに電話じゃ話しづらいんじゃない？
- 香 ええ。じゃあ、今から伺います。
- かなえ (フィルター音) 気をつけて来てね。じゃあ。
- 香 はーい。
- (効果音) (受話器を置く音)
- ナレーション この優しい声の持ち主、かなえさんはちょっとしたヴァイオリニスト。3年前に結

香 婚して近所に住むようになってからの付き合い。クリスチャンで、なんとなくすてきで、いつも相談に乗ってくれる、本当に優しい人なのです。

かなえ ごめんください。香です。

香 いらっしゃい。さあ、こちらへどうぞ。今、ジュース持ってくるわ。

香 モノローグ すみません。

香 モノローグ なんて言って話そうかなあ。あったこと、思ったこと、全部素直に話せるかなあ。三角関係だなんて、かなえさん、ヘンに思わないかなあ。こうして来てはみたものの…。(ため息)

かなえ はい、これ、わたしが焼いたクッキー。食べてみて。

香 どうも。でも、なんか食欲なくて。

かなえ まあ、香ちゃんにしては珍しいわね。何か悩み事なんでしょ？ さては恋の悩みかな？

香 かなえさんって、鋭いですね。

かなえ (笑い)香ちゃん、中3だっけ？ 青春時代突入ね。それで一体どうしたわけ？ そんなに元気がなくなるほど、何があったの？

香 そう。複雑なの…。

ナレーション わたしはかなえさんに一部始終を話すことにした。

香 かなえさん、雄君って知ってるでしょう？

かなえ ええ、鈴木さんちの雄君でしょ？ 知ってるわ。なかなかのハンサムね。

香 そうなの。なかなかのハンサムなのよね。わたしね、近所に住んでから幼なじみなの。小さいころなんてちっともそうじゃなかったのに、中学3年になったらがぜん光ってきて、今、同じ中学なんだけど、ちょっと気になる存在なの。ところが、わたしの親友のひろ子も同じ気持ちらしいんですよ。きっかけはね…。

(音楽) (回顧のブリッジ)

(効果音) (終業のベル)

牛島ひろ子 ねえ、香。体育館行かない？

香 行ってもいいよ。

ひろ子 行こ 行こ。

香 体育館になんの用事？

ひろ子 あ！

香 ねえ、体育館行くんでしょ？ 早く行こうよ。

(効果音) (テニスの練習風景)

香 モノローグ ヘンなひろ子。テニス部に好きな子でもできたかなあ。一体だれを見てるのかしら。

鈴木雄 あ、おーい、高藤！ 「こないだはどうも」って、うちのおふくろが伝えとけて。なんか、ごちそうになったとか。

香 あ、おばさんね。いいえ、どういたしまして。雄君、テニスうまそうね。1年の時からやってるんでしょ。

雄 まあね。でもそれほどうまくないよ。じゃあ、練習中だから。

香 頑張ってるね。

ひろ子 今の人、3Bの人でしょ？ 香、友達なの？

香 うん。鈴木雄君。近所で幼なじみなんだ。小さいころはよくケンカばかりしてたけど、しばらく見ないうちに大きくなってたんで、驚いちゃった。前は、わたしより背がちっちゃくて、キャンキャン声だったのに。テニスも、中学2年の時、もう全国大会に行ったんだって。それに、割合優しくて、小さい妹がいるの。その子の面倒とかよく見るみたいよ。こないだ、自転車の後ろに乗せてたわ。

ひろ子 ふーん。雄君。鈴木雄君っていうんだぁ…。

(音楽)
(ブリッジ終わる)

香 多分、前からひろ子は雄君を“いいな”って思ってたんだと思うんです。この時から、話題の中に雄君が何度も出てくるようになって、放課後なんか、2人でテニス部の練習見に行ったりして…。

かなえ ふーん。ひろ子さんて、どういう女の子なの？

香 ひろ子って、明るくて、すごくわたしと気が合うの。中1の時から同じクラスで、いろんなこと正直に話し合える、そんな友達。親友と思ってるんです。

かなえ そう。ね、香ちゃんは雄君をどういう風に好きなの？

香 どういう風になって言われても…。うーん、わたしは以前からずっと好きだったってわけじゃなくて、やっぱり最近かな。ひろ子に、いろいろ雄君の話しているうちに、自分でも、雄君のよさってうか、なんかそんな発見があって、いつの間にか魅^ひかれてたって感じです。

かなえ ふーん、なるほどねえ。それで？

香 わたし、このこと、ひろ子に話そうか、話すまいかって迷ってるんです。ひろ子の気持ちすごく分かるし、きつと言ったらショックだろうなあって思うし…。でもひろ子ったら、わたしに本心言わないんです。それなのに…。

かなえ それなのに？

香 こないだ、こんなことがあったんです。

(音楽)
(回顧のブリッジ)

ひろ子 ねえ、香。鈴木君の家って、ここから近いの？

香 その2軒向こうの青い屋根の家よ。

ひろ子 ふーん。

香モノローグ 行ってみたいなら、そう言えばいいのに。ひろ子、どうしてわたしに言わないの？ 白々しい。わたしの思いに気づいてるのかしら。

香 ひろ子、ちょっとコーラ買いに出ない？

ひろ子 え？ あ、行くわ。

香モノローグ ひろ子ってば、今日、わたしの家に遊びに来たのも、きっと雄君の家を知りたいからなんだわ。

香 ひろ子、ここよ、雄君ち。

雄の父 あ、香ちゃん。元気かい？ 久しぶりだねえ。

香 こんにちは、おじさん。ほんとに久しぶりです。

雄の父 雄に用事かい？ (奥に)雄、雄！

香 あ、おじさん。通りがかっただけですから。

雄 (奥から出てくる)何、父さん？ あ、高藤じゃん。なんか用事？

香 べ、別に用事じゃないの。この子、牛島ひろ子。顔は知ってるでしょ。わたしの親友よ。

ひろ子 こんにちは。

雄 あ、どうも。

香モノローグ わたしって、何バカなことしてるんだろ。まるで裏目に出てる感じ。本当はひろ子と雄君を会わせたくないのに。これじゃあひろ子の思うままじゃない。

(音楽) (ブリッジ終わり)

香 その時のひろ子、本当にうれしそうで、わたしの家に戻ってから、一人で機嫌よくして、わたし、それを見ると余計ムシャクシャしてしまって。なんだかそういう自分が情けなくて。親友だなんて、本当はちっともそうじゃないって分かったんです。わたしはわたしで、ひろ子に敵対意識を持って、少しもよいことをしようとしていないんです。以前は、ひろ子だって、わたしだって、なんでも話し合えたのに。今は、好きな人のこと、互いに黙って探り合っているようで、とってもイヤな感じなんです。雄君は、こんなことちっとも知らないらしくて、いつもと変わらない対応なんですけど。わたし、この際、言ってしまうおうかと思って、雄君に、「好きです。わたしと付き合ってください」って。なんか、もうひろ子との友情なんて…。

かなえ ちょっと ちょっと待って。香ちゃん、お話聞かせてもらって、あなたの気持ちよく分かるわ。でもわたし、今、香ちゃんが考えてることって、そんなに簡単に行動してはいけないことだと思うの。ねえ、“好き”ってどういうこと？ “付き合う”ってどういうこと？ 相手がどう思ってるかも確かめなくて、自分の気持ちを満足させるために、親友を捨ててもいいのかなあ。友情って、今のあなたに一番大切なものでしょ？ あなた、まだひろ子さんと話し合ったわけでもないし、大して深い考えがあるようにも思えないわ。行動する前に、冷静になって、それから決めてみて。そうでないと、雄君との関係まで、ゆがんでしまうわよ。それじゃまるで、音の濁った“変形トライアングル”よ。そうなってもいいの？

ナレーション じっと聞いてくれていた優しいかなえさんからは、想像のつかないキビしい言

葉だった。

香モノローグ “変形トライアングル”か…。わたしだって、そうなりたくない。ひろ子を傷つけるなんて。でも、このまま行ったら、雄君は、雄君はきっと…。教えて、どうすればいいの？(多重エコー)

<後編>

香モノローグ “変形トライアングル”か…。
ナレーション かなえさんに、わたしと友人の牛島ひろ子と鈴木雄の三角関係について話したら、わたしのこれからの行動によっては、変形したトライアングルのように、音の濁った状態になるだろうと言われた。わたしは、返す言葉もなく、心の中で叫んでいた。かなえさんは、庭の色づいたモミジの木を眺めながら、何か考えているようだった。

かなえ 香ちゃん。人を好きになるって自然で当たり前のことだわ。それはひろ子ちゃんにとってもそうよね。ひろ子ちゃんが、香ちゃんに「わたしも雄君好きなの」って言えないのは、きっとあなたとの友情を考えているからじゃないかしら。

香 そうかもしれないけど…。

かなえ 香ちゃんだって、自分で言おうとしなかったのは、そのためじゃないの？ ひろ子ちゃんとの仲が悪くなるのを恐れてじゃないの？

香 ……。

かなえ どちらかが、祐君との二人だけの付き合いを、つまり恋愛をすればしたら、やはり、香ちゃんたち、気まずくなるわよね？ でも、その前に、“付き合う”って、“恋愛”ってどういうことかしら。そこまで考えたことある？

香 んー、深くはないけど、結構友達なんかには付き合ってる彼とのこと、聞いたりして。割とみんな、好きな人いるんですよ。すると簡単に体も許したりして。

かなえ そうねえ。でも、みんながそうだから、“右に倣え”でそうするんじゃないでしょう？ でも“そうになりたい”って気持ちは分かるわ。

わたしが音大に入って間もなく、あるすてきな男性に出会ったの。その人はクリスチャンで、わたしを最初に教会に誘ってくれた人なの。

香 かなえさんって、最初からクリスチャンじゃないんだ。

かなえ (笑って)そりゃそうよ。“生まれてみたらクリスチャン”なんてだれもいないわよ。わたしの場合は、大学2年の時に信仰を持ったのよ。その人も大学生で、熱心な人だったわ。わたし、その人を見てて、「神様を信じてる人ってすばらしいな」って思ったの。どこかほかの男性と違うのよ。教会で接することに、なんて言うか喜びを感じるようになって、そう、いつの間にか大好きになってしまったの。教会の中の何人かの女性も、やっぱりわたしのように思っていたでしょうね。本当に、そういう人だから。その時のわたしも、「お付き合いしてみたいな」って

思ったの。だれにも相談せずに、いえ、神様には相談したわ。「神様のみ心ならば、彼と交際させてください」ってね。そして手紙を出したの。

香

ふーん。それで、どうでした？

かなえ

しばらくして、彼がわたしを呼んで…。そう、礼拝堂でだったわ。

(音楽)

(回顧のブリッジ)

白石貴夫

呼び出してごめんね。話っていうのは、君がくれた手紙の答えをしなくちゃと思って。あの手紙、ありがとう。本当にうれしかった。でもね、今、僕、そういう交際はできないんだ。僕って、正直言って弱い人間だから、気になる女性とかできると、もう信仰どころではなくなってしまうんだ。好きな人ができると、どうしても気を取られるでしょう？ 僕には今、やるべきことがあって、それに一生懸命で痛いんだ。君も神様を信じているから分かるだろう。神様に仕えたいんだ。そのために今は、信仰を整えておきたい。交際したら、僕は誘惑に負けそうな紀がするんだ。それは君に対しても失礼なことだし、大体、結婚を前提としない恋愛は、ありえないでしょう？ 特に女の人にとってはそうだと思うんだ。だから結婚の必要な時が来るまで、いたずらに付き合ったりする、いい加減なことは避けたいんだ。分かってくれるよね？

香

…ええ。

貴夫

君からの手紙、本当にうれしかったよ。でも今、こういう気持ちだから。これも祈って決めたことなんだ。互いに、信仰の友でいようよ。祈り合って、助け合って、それぞれのなすべきことに励もうよ。君に伝えるために、今手紙書こうかどうか迷ってたんだけど、やっぱりきちんと口で言わなきゃと思って。

香

…分かったわ。

(音楽)

(ブリッジ終わり)

かなえ

というわけで、結局は交際を断られてしまったの。

香

悲しかったですか？

かなえ

うん。悲しかったのは事実ね。でも、大切なものを教わったわ。

貴夫

(エコー)結婚を前提としない恋愛は、ありえないでしょう？ 特に女の人にとってはそうだと思うんだ。だから結婚の必要な時が来るまで、いたずらに付き合ったりする、いい加減なことは避けたいんだ。

かなえ

彼の真剣さから、その意味がよく伝わってきたの。それまでわたしは、“好き”っていう感情だけで、お付き合いを考えていたのね。けれど彼はもっと深く、真剣な態度で受け止めていたのよ。しかもわたしの立場に立ってね。それに彼は、一生懸命やるべきことがあって、それに向かってまっすぐなんですもの。わたし、彼の生き方に、なんか近ごろあまり見かけないひたむきさっていうか、すがすがしいものを感じたわ。

香

うーん、その人って、いい人ね。かなえさんが好きになるのももっともだわ。

かなえ (笑い)わたしね、断られたけど、なんか、ますます好きになっちゃったのよ。でも、それからわたしが望んだのは、彼とのデートやそんなお付き合いじゃなくて、わたしも、彼のように何か一生懸命になろうってことだったの。

香 へえー。そんな風に考えられるのって、うらやましいなあ。

かなえ わたし、音大でヴァイオリンやってたでしょう。その時から本気で頑張るようになったわ。なんのためにって言えば、それはわたしの信じている、そして彼の信じている神様のためって決心したの。彼の言葉を通して、自分の道を見つけたのよ。

香 かなえさん、今本当にヴァイオリニストだもんね。すごいなあ。わたしだったら、落ち込んで、きっと自殺したくなっちゃう。わたし、キリスト教と違ってよく分かんないけど、そういうの聞いてると、神様っているような気がするなあ。

かなえ あら、本当に神様はいらっしゃるのよ。わたしね、ヴァイオリンでコンサート開く時、ただコンサートするだけじゃなく、聖書のお話や、自分がクリスチャンになった時のことを、来てくださった方々に話してるの。神様って本当にいらっしゃるんだもの、みんなに知ってほしくて。

香 ふーん。

かなえ わたしのだんな様も、実は、伝道師とって、そういう仕事をしているのよ。

香 へえー、そうなんですかあ。

香モノローグ かなえさんの話を聞いていたら、なんだか自分の考えの浅さに気づかされたようで、今までのつまらないほど単純だった悩みが吹き飛んでしまった。“自分はまるで真剣じゃなかったな”って思う。かなえさんが、クリスチャンのその男性の生き方に、すがすがしさを感じたように、わたしもかなえさんから感じるものがあつた。

香 かなえさん、わたし、もっと真剣に考えて、ひろ子とも話し合ってみます。今日話してくれたこと、とても大切なことだから、ひろ子にも話してあげるの。それから、わたしにもきくと、やるべきことがあると思うから、それも探したいです。かなえさんのように、自分の道をしっかり見つけたいんです。わたし、かなえさんのような女性になりたいなあ。どうしたらそんな風になれるんですか？

かなえ あらまあ。面と向かって言われると照れちゃうわね。聖書にこんな言葉があるのよ。「どのようにして、若い人は自分の道を清く保てるでしょうか。あなたの言葉に従って、それを守ることで。」(詩篇 119:9)

香 “あなた”って？

かなえ 神様のことよ。

(効果音) (玄関のチャイム)

かなえ あら、だんな様のお帰りかしら。ちょっと待っててね。

香 あ、もうわたし、失礼しますから。

雄 ふーん、教会かぁ。そう言えば、小さいころ日曜学校とか行ってたっけなぁ。ご
ぶさただから、たまには行ってみるか。

香 よし、決まり。園子、ダッシュで帰ろう。

園子 うん。

香 それ！

雄 おい、ちょっと。待てよー！

ナレーション わたしは、驚いてる雄君の声を背にしながら、「神様、ありがと」と心の中でささ
やいていた。

< 完 >